

プレアクト情報

◎ ◎ ◎
PRE-ACT

■アクトトレーラー

全てを諦めた顔で、少女は言った。
「私を、殺してください」と。

全てを蔑んだ顔で、少女は言った。
「私を、護ってください」と。

だからカタナは剣を取り、
だからカブトは盾を取る。
舞台の上では綺麗な舞踏。少女と踊る死の舞踏。
剣と盾とが打ち合って、そこに現れるものは何？

トーキョー N◎V A The Detonation
『**矛盾** -Sword & Shield-

泣きそうな顔で、少女は言った。
「そんな運命、私は、いない」

■シナリオ情報

▼推奨プレイ環境

テキスト、Skype、オフのいずれにも対応。
やや時間が長くなるので、Skype、オフ推奨。

▼プレイ時間

4～6時間（テキストの場合、9～15時間）

▼プレイヤー人数

2人固定

▼シナリオ傾向

2人用シナリオ、ストリート、叙情的

●レギュレーション

本誌に収録されているデータでの想定レギュレーションを以下に記載する。ただし、使用するデータの変更や RL が調整を行った場合、改めてレギュレーションを提示すること。

使用経験点：20～100点程度を想定

最大達成値：20台後半

■キャスト作成

プレアクトシート（アクトトレーラー、ハンドアウトなど）を参考にキャストを作成すること。

●推奨スタイル

- ①『カタナ』：殺し屋
- ②『カブト』：ボディガード

●キャスト間対立

本シナリオは2人用である。しかも、カタナとカブトという相反するスタイルの2人が、一見対立したような状況下でストーリーが始まる。N◎V Aならではの、ギスギスとしたキャスト間対立の雰囲気演出するにはもってこいだ。

しかし、最終的には2人が協力して真の敵を倒すことになるだろう。対立の演出を楽しむのは良いが、プレイヤー間はしっかり協力し合うこと。

推奨スタイル：カタナ

SCENARIO HANDOUT

コネ：ルシア

推奨スート：理性

依頼があれば誰だって殺すのが商売だが、こんな依頼人に会ったのは初めてかもしれない。不治の病に侵された少女は、全てを諦めた顔でキミに言った。私を、殺してください、と。

条件は2つ。殺されたことが、誰にでもわかる状態で殺すこと。そして、殺されたことが、誰にでもわかる場所で殺すこと。奇妙な依頼人の、奇妙な依頼。だが、そこから伝わる必死の願いに、あなたはいつしか頷いていた。

【PS：ルシアの願いを叶える】

推奨スタイル：カブト

SCENARIO HANDOUT

コネ：ルシア

推奨スート：理性

依頼があれば誰だって護るのが商売だが、こんな依頼人に会ったのは初めてかもしれない。不治の病に侵された少女は、全てを蔑んだ顔でキミに言った。私を、護ってください、と。

条件は2つ。拘束期間は、原因に関わらず彼女が死亡するまで。そして、護られていることが、誰にもわからないように護ること。奇妙な依頼人の、奇妙な依頼。だが、そこから伝わる必死の願いに、あなたはいつしか頷いていた。

【PS：ルシアの願いを叶える】

●必要な神業

インヴァルネラブル
《難攻不落》には使用想定シーンが存在し、それ以外に
キャストが敵の神業のみでリタイアするのを防ぐために、
1 個の防御系神業が必要だ。

なお、プレイヤーが 2 人であることから、神業の遊びは
かなり少ない。神業構成次第では、プレイヤーの望む結末
が得られないといった事態に落ちる可能性がある。キャスト
作成はしっかりと相談をしながら行ってほしい。(*)

●情報収集について

プレイヤー人数が少ないため、2 人ともが情報収集を
しっかりと行える必要がある。キャスト作成の折には、〈社
会〉〈コネ〉技能は推奨である 3 レベル以上を必ず取得す
るようにしよう。

本シナリオの情報収集で主に使用する社会技能は、〈社
会：N◎VA〉〈社会：ストリート〉〈社会：テクノロジー〉、
あるいはそれに準ずる 〈コネ〉 などである。(*)

■キャスト間コネクション

キャスト間のコネはお互いが交換する形で取得するこ
と。

R L用テキスト

◎ ◎ ◎
T X T 4 R U L E R

■ストーリー

『カタナ』そして『カブト』の前に現れた依頼人、ルシア。自身の殺害と護衛、不治の病に侵され、残り少ない命を弄ぶかのように、相反する依頼をする彼女の真の目的は、自身の死が白日の下にさらされることにあった。

ある河渡系組長の隠し子として生を受けた彼女は、しかしその立場の難しさと病から、ひっそりと死んでゆくことを選ぶ。だが、彼女の主治医であり、裏社会とつながりのある男、“振り返れば奴がいる” 司馬紅太郎は彼女の立場を利用し、自らが成り上がることを画策していた。

彼女の死後、手懷けたヒトニ（殺した人間と成り変わるヒルコ的一种）を彼女と入れ替わらせ、組長に接近し、そして己を認めさせ、いずれは組を乗っ取るその計画は、しかし偶然、その一部がルシア本人の知るところとなる。

今までひっそりと生きてきたことを無駄にしないためにも、父を頼るわけにはいかない。ならば、自らが釈明のできない状況で死亡し、その事実が公表されれば、誰にも己の死を利用することはできなくなるはず。そのために、『カタナ』と『カブト』を、自身の最後の時間を共に過ごす剣と盾として選んだのだ。

本シナリオは、キャストたちが司馬の陰謀を打ち砕き、ルシアの死を見届けることができれば終了となる。(*)

■クライマックスへの条件

事件の裏に司馬がいることをキャストたちが確信し、司馬と“エインセル”を迎撃することを決めたらクライマックスへと突入する。

ゲスト情報

◎ ◎ ◎
G U E S T D A T A

■ルシア

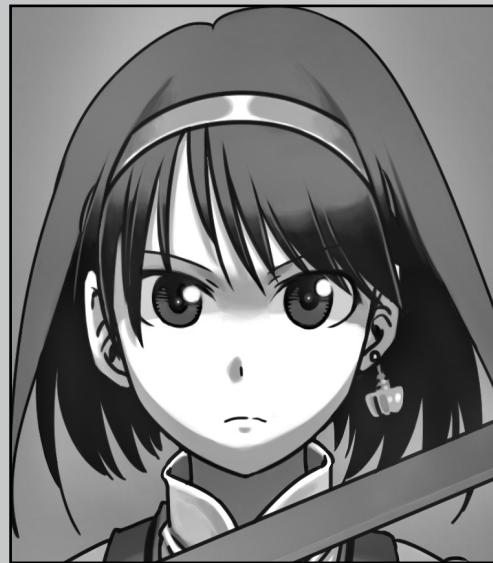
ミストレス、マネキン◎、トーキー●

▼解説

「あなたの腕、信頼しています」

ストリートの少女。あるストリートの大物と愛人の間に生まれた娘であるが、生来病弱でありベッドを離れられない生活を送ってきた。なお母親が彼女を生む前に父親である大物の元を離れたため、父親は彼女の存在を知らない。

死んだ母が遺した金を頼りに暮らしてきたが、シンデレラ・シンドロームを罹患。自分の残り時間が短いこと、そしてそれを利用しようとしている何者かがいることを知り、その陰謀を砕こうとして今回の依頼を行った。



オープニングフェイズ

OPENING PHASE

●カタナ：少女は求める、最強の矛を

登場：他のキャストの登場不可

◆解説

『カタナ』のオープニング。ルシアが訪れ、自分を殺害してくれるように依頼する。(*)

◆描写

その日、キミの行きつけの店に現れたルシアと名乗る少女の奇妙な依頼。それは、自分を誰にでもわかる場所で、誰にでもわかるように殺してほしい、というものだった。

依頼の内容もそうだが、それ以上に奇妙なのは彼女の表情だ。感情のうかがい知れない、すべてを諦めたような……けれど、単なる自殺志願には思えないその表情が、キミにはなぜか気になった。

▼セリフ：ルシア

「あなたが『カタナ』さんですね。凄腕の殺し屋だとお伺いしました。ひとり、殺してほしい人間がいるんです」

「標的は、ルシアという女性。……私です。明日からならいつでもいい。ただし、条件がひとつ」

「必ず、殺されたことが誰にでもわかる場所、誰にでもわかる殺し方で……万が一にも、生きている、なんて思う人がいないように殺してください」

「それと、私の命はもう長くない……病気、なんです。だから、必ずその前に終わらせて」

「報酬は前金で1 ゴールド。成功報酬は1 プラチナム。私の生体反応がなくなったら追加報酬がおりるようにしておきます……受けて、もらえますよね？」

◆結果

「……ありがとう。あなたの腕、信頼しています」

『カタナ』が依頼を受けると、それだけ告げてルシアは去ってゆく。彼女は結局、一度も表情を変えることはなかった。

【P S：ルシアの願いを叶える】を渡し、演出を確認してシーンを終了すること。

●カブト：少女は求める、最強の盾を

登場：他のキャストの登場不可

◆解説

『カブト』のオープニング。『カブト』のもとにルシアが訪れ、自分を護衛してくれるように依頼する。

◆描写

その日、キミの行きつけの店に現れたルシアと名乗る少女の奇妙な依頼。それは、護衛されていることが誰にもわからないように、護ってほしい、というものだった。

依頼の内容もそうだが、それ以上に奇妙なのは彼女の表情だ。キミではない誰かへの蔑みもあらわな、けれど、その奥に悲しみを秘めたようなその表情が、キミにはなぜか気になった。

▼セリフ：ルシア

「『カブト』さんですね。あなたを腕利きと見込んで、依頼があるんです」

「私を護ってください。明日から、どんな理由にせよ、私が死ぬまで」

「安心してください、そう長い仕事にはなりません。私はもう長くありません……病気、なんです」

「条件がひとつあります。護衛されていることが、誰にもわからないように……難しいかもしれないけれど、一流と言われるあなたなら可能なはず」

「報酬は前金で1 ゴールド。終了後に1 プラチナム。私の生体反応がなくなったら追加報酬がおりるようにしておきます……受けて、もらえますよね？」

◆結果

「……ありがとう。あなたの腕、信頼しています」

『カブト』が依頼を受けると、それだけ告げてルシアは去ってゆく。彼女は結局、一度も表情を変えることはなかった。

【P S：ルシアの願いを叶える】を渡し、演出を確認してシーンを終了すること。

自分の殺害依頼

ルシアにこの奇妙な依頼の詳しい理由を尋ねても、明確な答えは帰ってこない。

ルシアは、陰謀の黒幕の正体や詳しい内容を知っているわけではなく、確証情報も何も持っていないため、自分の死を利用しようとしている何者かがいるのではないかという疑いを口に出せずにいるのだ。

詳しく知るには、リサーチを進めてもらおう

リサーチフェイズ

RESEARCH PHASE

■クライマックスの条件

事件の裏に司馬がいることをキャストたちが確信し、司馬と“エインセル”を迎撃することを決めたらクライマックスへと突入する。

●カタナ：もうひとつの影

条件：リサーチ最初のシーン

登場：〈社会：N◎V A、ストリート〉 10

◆解説

『カタナ』がルシアを狙っている時、自分以外の殺気を確認するシーン。その殺気は確実にルシアに向かっているが、周囲にはエキストラしかおらず源を確認することはできない。(*)

◆描写

依頼通り、ルシアという少女を狙うためストリートにやってきたキミは、雑踏の中で嗅ぎなれたにおいを感じた。

キミと同じ血と殺意の、誰かを狙う殺し屋のにおい。いや、キミにはわかる。このにおいの主は、キミと同じ相手を。ルシアを狙っている、と。

◆結果

だが、出所を探すキミの目に映ったのは、街の雑踏だけだった。このシーンのあと、【殺気の主】についてリサーチ可能となる。

●カブト：シンデレラのように

条件：「●カタナ：もうひとつの影」の直後

登場：〈社会：N◎V A、ストリート〉 10

◆解説

『カブト』とルシアが街を歩くシーン。

シーンの最後にカブトに目標値 18 の〈知覚〉判定を行わせること。成功すれば、彼女のつけているイヤリングに盗聴器(『TND』p268)が仕掛けられていることがわかる。【ルシアのイヤリング】の情報を開示すること。

◆描写 1

本来、出歩かない方が護衛はしやすい。だが、ルシアはなぜかキミを連れて街を歩くという。

その表情こそ変わらないものの、足取りはどこか弾んで見える。キミにとっては何の変哲もない街並みを、自分の中に刻み込むように進む姿。

それは彼女自身の言うとおりの、残り少ない命に思い出を作るため、なのだろうか。

▼セリフ：ルシア

「『カブト』さんは、この辺りにはよく来るんですか」

「私は、以前はベッドの上にいることが多かったので……色々なものが珍しいんです」

「もうすぐ失ってしまう景色ですから。すみませんが、お付き合いですね」

◆描写 2

街を歩き、ウィンドーショッピングを楽しみ、ちょっとした買い食いをする。そんななんでもないことを、一つ一つ確かめるようにする彼女。

ふと、彼女の横顔を見る。耳に光るイヤリングに、キミはふと違和感を感じた。

(※〈知覚〉判定を行わせる。成功した場合)

彼女のイヤリングが、ほんのわずかだが点滅している。……盗聴器だ！

◆結果

ある程度会話をしたら、シーンを終了すること。

殺気の源を確認する事はできない

これは、“エインセル”が〈有象無象〉を使用して登場しているためだ。殺気に気づかれた後、“エインセル”も『カタナ』の存在を確認し退場する。

なお、『カタナ』が知覚を試みた場合、〈隠密〉〈透明化〉で対抗すること。このシーンの目的は、自分の他にルシアの殺害を狙うものがある、ということをプレイヤーに示すことである。一通り演出を行なったら、すぐにシーンを閉じるとよいだろう。

盗聴器

〈知覚〉の判定に失敗すると、なにも見つからない。ただし、次のRLシーンで盗聴されているであろうこと自体は、プレイヤーに公開される。盗聴器は見つけても見つからなくても、ストーリー進行に影響は無い。だが、プレイヤーがどうしても見つけておきたいというのであれば、再度判定をさせてもよい。

●R Lシーン：アンダー・ダーク

条件：「●カブト：シンデレラのように」の直後

登場：キャストの登場不可

◆解説

黒幕である、司馬と“エインセル”の会話。なお、このシーンでは黒幕の正体は明かさない。(*)

◆描写

その部屋で、男はひとり、椅子に座っていた。

DAK 画面に映る月並みな医療ドラマだけが、ちらつきながら部屋の中を照らしている。

「それで、なにがいたって？」

唐突に発せられた問いかけ。

だがその問いは、部屋の闇に溶けはしなかった。

「殺し屋だ」

いつの間にか背後に現れていた影が、少女の様な声で、そう答えたからだ。

▼セリフ：謎の二人組

影「名前は確か……『カタナ』。君が雇ったんじゃないのか」

男「『カタナ』？ 知らない名前だな。第一、彼女にそんなに派手に死んでもらっては困るんだ。なぜお前以外を雇う必要がある？」

影「……でも、ボクは確かに」

男「俺が知るか。……だが、不確定要素は潰しておくに限るな。やれるか？」

影「……別に、あれは欲しくない」

男「そう言うな“エインセル”。最後にはちゃんと、お前は
お前自身になれるんだ」

男「そうだ、それともう一つ。ルシアが『カブト』とかいう
ボディガードを雇ったぞ。……尻尾は出していないはずだが、勘のいいガキだ」

影「……わかった。先に、『カタナ』だね（姿が消える）」

◆結果

「『カタナ』、か……そいつを動かしているのは、お前か、
ルシア？」

クク、と肩を揺らす男の視線の先。

DAK ヴィジョンでは、医者 of 男がかつて蹴落とした同僚に刺され、驚きに目を見開いていた。

シーンを終了すること。

●カタナ：誰がそんなことをしたんだい―“自分自身”

条件：前のシーンの後、【“エインセル”】の情報を得た

登場：〈社会：N◎VA、ストリート〉 10

◆解説

“エインセル”が『カタナ』を襲撃するシーン。

“エインセル”は『カタナ』の姿になって現れ、^{インセンサブル}《不可知》で『カタナ』を攻撃する。防がれると退場するが、キャストが妨害しようとした場合、カット進行に入ること。(*)

◆描写

雨の中、ストリートを歩く『カタナ』の前に現れた影。まるで闇から浮き出てきたかのように表れたソレは、キミと同じ顔をしていた。

「やあ『カタナ』。“自分自身”に出会う気分はどうだい」

にまり、と。確かに自分と同じ顔なのに、見たこともないほど狂気に満ちた笑顔を浮かべ。もうひとりの『カタナ』は、確かにそう言った。

▼セリフ：エインセル

「君になりたいわけじゃないんだが、依頼主が君を殺せというんでね」

「“自分自身”の手で死になよ、『カタナ』！！」

※^{インセンサブル}《不可知》を使用

(防がれた)「……！ ちいッ！！(少女のような姿に変わる)」

(倒された)「……これが、“ホンモノ”ってこと……？」

◆結果

「……やっぱり、お前なんかいらない。最初から、ボクが欲しいのはルシアの姿だもの！！」

そう言い捨てると、少女の姿をした暗殺者は再び夜の闇へと消えた。

シーンを終了すること。

黒幕の正体

このシーンでは、司馬のペルソナはレッガーである。プレイヤーに聞かれた場合、そう答えること。

“エインセル”とのカット進行

“エインセル”はカット進行で神業を使用しない。死亡した場合、そのままシーンを終了する。

舞台裏で、司馬が〈医療〉〈スーパードクター〉〈ブランチ：ドクター〉で蘇生する。

キャストが神業などで“エインセル”を倒した場合、判定では治療できないので《アナザーライフ》で復活すること。

●カブト：告知

条件：司馬のアドレスに向かった

登場：〈社会：企業、テクノロジー〉 10

◆解説

司馬のアドレスを入手し、彼に話を聞きに行くと発生するシーン。司馬はキャストたちに対し、患者の心配をする医者として対応する。

なお、このシーンで司馬が正体を現すことはない。もしキャストが彼を疑っている場合、誠実な医者に見える、と説明して構わない。

◆描写

新星帝都大学附属病院の一角。そこで、その男は待っていた。

司馬紅太郎。ルシアの主治医。

「あなたは、ルシアとは……？」

彼は『カブト』の姿を見て、怪訝そうな表情で口を開いた。

▼セリフ：司馬紅太郎

（依頼のことを話す）「彼女が、そんな依頼を？」

「馬鹿なことを。確かに彼女は、最近何者かに狙われている気がする、と言っていました……不安を抱えると、そう思うことがよくあるものです。私に相談された時も、気のせいだろう、とは言ったんですが」

「……ルシアの病は現在治療不可能と言われていましてね。

“シンデレラ・シンドローム”、ご存知ですか」

「おとぎ話の魔法は12時で切れるでしょう。あれに例えてそう呼ばれています。正直難しい病気ですよ」

「おとぎ話と違うのは、その先に待っているのが王子様との幸せな結婚などではなく、確実な死、ということです。ですが……」(*)

「僕は必ず、彼女の治療法を見つけてみせる。今、いいところまでこぎつけているんですよ」

（私財をなげうっていることについて聞く）「お恥ずかしい。何しろ症例の少ない病気なもので、研究費も多くはなく。ですが、それもきっと、もうすぐ解決しますよ(*)」

◆結果

「『カブト』さん、僕からもお願いします。あと少しの間、彼女を護ってあげてください」

そう言って、男は頭を下げる。シーンを終了すること。

●カタナ：私を殺して

条件：【“振り返れば奴がいる”】の情報を手に入れた

登場：〈社会：N◎VA、ストリート〉 10

◆解説

ルシアが『カタナ』に連絡を取り、依頼の遂行を促すシーン。ルシアはこのシーンで『カタナ』に《プリーズ!》を使用する。この《プリーズ!》の効果は、『カタナ』にエンディングまでにルシアを殺すことを約束させる、というものだ。(*)

これはこのシーンでの殺害や《死の舞踏》^{ダンス・マカブル}の使用を強制するものではない。

◆描写

深夜。『カタナ』のアドレスに連絡が入る。発信者は、今のキミの依頼主——ルシアだった。

「明後日、ウェンズデイ・マーケットへ行くつもりです」

キミが出ると、彼女はそう、切り出した。

▼セリフ：ルシア

「多分……そろそろ、時間切れだと思うんです」

（“エインセル”のことを話す）「そんなことが……？ もしかして、私を狙っている誰か、でしょうか……」

「あの、依頼のこと、覚えてますよね」

「ウェンズデイ・マーケットなら、場所としては最適だと思いますか？」

「だから、『カタナ』さん。明後日には……ちゃんと、私を殺してくださいね」※《プリーズ!》を使用

◆結果

「待っていますから。……おやすみなさい」

シーンを終了すること。

シンデレラ・シンドローム

この会話をしている段階で、まだシンデレラ・シンドロームに関する情報を得ていない場合、ここで情報収集判定をさせるといいだろう。

その場合は、〈交渉〉などでも情報収集が可能とするとよい。（目の前にいる専門家に聞くのだ）

「もうすぐ解決しますよ」

司馬のこの言葉の真意は、つまりルシアの死を利用する事で、もうすぐ莫大な金が入る、という意味だ。司馬はその金を使って、シンデレラ・シンドロームの研究を続けるつもりなのだ。

司馬は悪人だが、それでも医者（タタラ）のスタイルを彼なりに貫いてはいる。

ルシアの《プリーズ!》

《ファイト!》では無いので、キャストの神業は増えない。お願いをするという、やや拡大解釈気味な使用方法だ。

●カブト：The Morning

条件：「●カタナ：私を殺して」の次のシーン

登場：〈社会：N◎VA、ストリート〉 10

◆解説

ルシアが『カブト』に対し、自分の考えを告白するシーン。ウェンズデイ・マーケットへ向かう日の朝を想定している。

彼女は自分がどうやっても助からないことを覚悟しており、そのために『カブト』を利用したことを謝り、改めて自分が『カタナ』に殺されるまで、自分を護衛してもらえるように依頼する。なお、キャストが自分からルシアに矛盾した依頼をしていることを問い詰める、と言いだした場合、先にこのシーンを発生させても構わない。その場合、クライマックスまでの流れを調整すること。

◆描写

「話が、あるんです」——そうルシアが切り出したのは、朝のことだった。その眼は、最初にキミに依頼をしてきた日のように真剣で……そして、罪悪感で溢れていた。

▼セリフ：ルシア

「もう、知っているかもしれませんが……先に、謝っておきますね。ごめんなさい」

「『カブト』さん。私は、あなたを利用していました」

「あなたのほかに、『カタナ』という殺し屋に依頼をしています……私を、殺してください、と」

「ご存知の通り、私はもう助からない病気です」

「そして、私の死を、利用しようとしている人がいる……多分、父である人に近づくために」

「以前、私のために義体を用意している人がいる、と看護婦さんが言っていました。でも、私はそんなこと聞いてない。それに……義体化のための検査も受けてないんですよ？ こんなことってあります？」

「私は、私の死を誰かに利用されるのは嫌です。母が、ひとりで私を育ててくれたことを無駄にしてしまう。……だから、決めたんです。誰にも利用させたりしないって」

「母の遺してくれたお金と私の残り時間を考えたら、『カブト』さんと『カタナ』さんを雇うくらいの余裕はありました」

「なににもなければ、それでいいんです。でも、本当になにかがあったら」

「これから、ウェンズデイ・マーケットへ行こうと思います。そこで、最期の時を迎えるために」

◆結果

「『カブト』さん、改めてお願いします。私が『カタナ』さんに殺されるまで、私のことを……護ってください」

ルシアは深々と頭を下げる。シーンを終了する。

●RLシーン：仮面舞踏会

条件：【“振り返れば奴がいる”の表の顔】を調べた

登場：キャストの登場不可

◆解説

司馬と“エインセル”の会話。

ルシアとキャストたちがウェンズデイ・マーケットへ向かうことを突き止め、人の多いところへと向かう前に彼らを仕留めようと動き出すシーン。(*)

◆描写

「ウェンズデイ・マーケットか。厄介だな」

頼杖をついたまま。“振り返れば奴がいる”と呼ばれている男……司馬紅太郎は呟く。

「どうやら、思ったより少しだけ早く、片を付けなければならぬようだな……“エインセル”」

その声に、やはり闇の中から現れる、少女の姿。

「ボクがあの子になれる時が来たんだね？」

▼セリフ：司馬と“エインセル”

司馬「そうだ。もっとも、奴らを殺してから、だがな」

エインセル「任せてよ。今度こそ……」

司馬「いや、俺も一緒に行こう。奴ら、俺の正体も突き止めたようだな。口止めは確実にしないとな」

エインセル「……いいよ。行こう」

◆結果

司馬がソファから立ち上がり、部屋を出ていく。

“エインセル”の姿もいつの間にか消えていた。

「●RLシーン：仮面舞踏会」

“エインセル”が死亡している場合、このシーンまで（あるいはこのシーン中）に蘇生するのを忘れないこと。

●カタナ&カブト：グリーン・マイル

条件：ウェンズデイ・マーケットへ向かった

登場：〈社会：N◎V A、ストリート〉 10

◆解説 1

クライマックス直前のシーン。ウェンズデイ・マーケットへ向かう途中のシーン。このシーンで、カタナとカブトが合流することを想定している。

ルシアはふたりに向かい、改めて矛盾した依頼をしたことを謝り、協力を乞う。

◆描写 1

ウェンズデイ・マーケットへ向かう途中。

人通りの多い道を選んできても、やはりどこかで裏道を通らなければならない。

敵が狙ってくるならここだろう、という道に入る直前で、ルシアは立ち止まる。

▼セリフ：ルシア

「『カブト』さん、『カタナ』さん」

「おふたりとも、おかしい依頼を受けてしまった、と思っているでしょう」

「本当に、ありがとうございました」

「おふたりのことは、忘れません……て、おかしいですよ。これから死ぬっていうのに」

「でも、忘れません。行きましょう。終わりに、するんです」

◆解説 2

“エインセル”が登場し、《突然変異》^{ミューテーション}でコピーした^{インセンサブル}《不可知》を使用。ルシアを殺害しようとする。カブトが^{インヴァルネラブル}《難攻不落》で防いだらクライマックスへ。

◆描写 2

ルシアが決意をした人間の顔で促した瞬間。

殺意の風が吹いた。

▼セリフ：“エインセル”

「キミを殺すのは“自分自身”さ、ルシア！」

（防がれた）「……ちっ！！」

◆結果

舌打ちをし、暗殺者は身を翻して下がる。その先には、道を阻むように自動車が止まっていた。

シーンを終了し、クライマックスへ。

クライマックスフェイズ

CLIMAX PHASE

●矛盾 -contradictions-

◆解説

ウェンズデイ・マーケットへ向かう途中の路地をアンタッチャブル《不可触》(*)で封鎖し、司馬が現れる。

◆描写

ふと気づけば、キミたちの路地の出口が車で塞がれている。そして、キミたちが振りかえったその先、車の中から、ルシアの主治医、司馬紅太郎……“振り返れば奴がいる”が降りてきた。

「おとなしくベッドで寝ていればいいものを、困ったシンデレラだ。おかげで、こんな大仕掛けをするハメになった」

その顔は、欲望と憎しみに歪んでいる。

▼セリフ：司馬紅太郎

「知ってるか？ 大学病院の給料は安くてね」

「名前を売るにはいいが、それを割り引いても安すぎる。研究にも金がかかるってのに、だぜ」

「ルシアの父親はストリートの大物なんだろう？ 娘を助けた医者となれば、随分な金をくれるだろうなあ」

「別に、中身が本物である必要はないだろ？ どうせ生まれてこの方口クに会っちゃいないんだ」

「さて、お喋りはおしまいにしようか。そろそろ……全員まとめて、死ねよ」

(倒された)「……何……？(信じられない、という顔で倒れる)」

▼セリフ：“エインセル”

(『カタナ』に)「今度は殺す。ボクのことを知ってるやつは、少ないほうがいい」

(『カブト』に)「キミはそこで見てなよ。もうすぐボクがルシアになる。そうしたら、ボクを護ってくれればいいじゃないか」

(断った)「……なら、キミも死ね」

(倒された)「いやだ、誰にもなれないで死ぬのは、いやだッ！！」

◆カット進行

敵は以下の通り。

・司馬紅太郎 : AR 2

・“エインセル” : AR 3

1 エンゲージ、キャストから近距離。キャストの戦力が十分だった場合、トループ(『GXD』P142の河渡会系ヤクザ)を追加すること。

敵を全員倒したらシーン終了。エンディングへ。

司馬の《不可触》

これにより、このシーン中の人の生き死には、世間には認知されなくなる。ルシアが死んでも、その事実は人々には伝わらない。

エンディングフェイズ

ENDING PHASE

■トゥルーエンディング

以下に示すのは、本来シナリオで想定されているエンディング……すなわち、「ルシアが死亡する」場合のエンディングのシーンである。

もし、何らかの方法でキャストがルシアの命を救った場合、後に示す特殊エンディングの項目を参照すること。

●カタナ&カブト：シンデレラ・タイム

◆解説

ルシアが死亡するシーン。キャストがなにもしなくても、ルシアはこのシーンの最後に死亡する。(*)

◆描写

ウェンズデイ・マーケットの雑踏の中。

もう誰に狙われることもない……そう感じたからだろう。楽しげに歩いていたルシアが、突然ふらつき、倒れこんだ。どうやら、魔法の時間は終わりかけているらしい。

▼セリフ：ルシア

「そろそろ、時間みたいですね……」

「『カブト』さん。ここまで私を護ってくれて、ありがとうございます」

「『カタナ』さん。約束です。私を、ちゃんと殺してくださいね」

「あまり、いい人生ではなかったですけど……最後に、あなたたちに会えて……よかった」

◆結果

そして、死の瞬間。彼女は確かに、微笑んだ。

ここでルシアが、神業^{エクスポーズ}《暴露》を使用する。(*)

周囲のざわめきが、そこにある死を理解したのだろう。やがて、悲鳴に変わる。

——そして、翌日。ニュースの片隅を、少女の死が飾った。

●カブト：ロンリーガール、グッドナイト

◆解説

『カブト』のエンディング。生前のルシアとの会話をキャストが回想している。詳しい時系列はシナリオ上では決めている。

◆描写

真夜中。ふと、彼女の言葉を思い出す。

「……『カブト』さんは、どうして人を護る仕事をしようと思ったんですか」

彼女が死ぬ、前の夜のことだ。

突然キミにそんなことを聞いてきた。

▼セリフ：ルシア（生前）

（『カブト』の答えを聞いて）「『カブト』さん、らしい気がします」

「私が、色々言えることじゃないと思いますけど」

「私、『カブト』さんに護衛をお願いしてから。悪夢を、見なくなりました」

「だから、きっと。死ぬ時も、きっと不安なんてないと思うんですよ」

「変なこと、言っちゃいましたね。……おやすみなさい」

◆結果

そのしばらく後、彼女はキミの前で、微笑んで死んだ。キミは確かに、彼女の魂を護ったのだ。

このシーンの最後に死亡する

病死か、望み通り殺害するか、どちらを選ぶのもキャスト次第だ。

ルシアは特に抵抗しないため、宣言さえすれば殺すことができるが、もしカタナが望むならルシアの《ファイト!》を《死の舞踏》に使ってもいいだろう。

《暴露》を使用する

これはあくまで、一人の人間の死を世界に知らせるためのもので、ルシアという少女が世界に残した、「自分が生きた証」だ。

この《暴露》によって、カタナが危うくなるような情報は流さないものとする。

●カタナ：葬送の鐘は響く

◆解説

『カタナ』のエンディング (*)。ルシアの父との会話。なお、ルシアの父はエキストラである。

◆描写

バーでグラスを傾けるキミの横に、白髪の混じった男が座る。

「……『カタナ』というのは、あなたか」

疲れたように問いかける男の横顔は、どこかで見た面影があった。

▼セリフ：男（ルシアの父親）

「殺して欲しい相手がいる。……と言っても、顔も名前もわからない」

「娘がいた。金を持たせて別れた女が、俺に黙って産んだ娘だ」

「その娘が、先日死んだ。恥ずかしい話だが、それを知ったのは死んでからになる」

「……できれば、娘の仇を取りたい」

「受けて、くれるか」

◆結果

男の問いに対し、カタナが何かを返したらシーンを閉じること。以上で本シナリオは終了となる。

「●葬送の鐘は響く」 編者注

正直申し上げると、このシーンは誰にでも対応できる内容ではない。多くの『カタナ』は反応に窮してしまうだろう。この演出を気軽にキャストぶつけるのはお勧めしない。

基本的に、エンディングはキャストが望む内容にするべきだ。プレイヤーにお任せしてしまっていていいだろう。

ならば、何故そんな内容をここに載せているのか。それは、これを読んだ RL 諸君は何となく理解してくれると思う。つまり、「超カッコいいから」だ。

この振りをかってよく打ち返してくれそうなキャスト（あるいはプレイヤー）がいた場合、是非とも試してみて頂きたい。そして、是非ともその結末を製作者に教えてほしい。

■特殊エンディング

キャストがルシアを救った場合のエンディングの一例を以下に示す。ただし、ルシアを救った方法によって、相応しい描写は変わってくるだろう。

以下の演出は、シーン立ての参考程度に留めてほしい。ルシアを生き残らせる過程で、多くのプレイヤーは色々と彼女を救う術、救う理由について思案したはずだ。ここから先は、プレイヤーが選び取った結末である。RLは適宜、キャストの行動に合わせてシーンを立ててほしい。

●カタナ&カブト：シンデレラ・タイム

◆解説

トゥルーエンドと同じシーンタイトルの共通エンディングシーン。キャストがルシアを救った場合、その結末が変わる。

ルシアを救う条件は以下のとおりとする。

- ①ルシアを救うには、神業が必要である。
- ②治療法が確立していない状態では、《タイムリー》や《^{M&A}買収》で彼女を救う事はできない。(治療の術を準備できない)
- ③シンデレラ・シンドロームはNPCではない。この為、^{ダンス・マカブル}《死の舞踏》などで無力化はできない。

なお、RLの判断はこれら全てより優先される。

◆描写

ウェンズデイ・マーケットの雑踏の中。

もう誰に狙われることもない……そう感じたからだろう。楽しげに歩いていたルシアが、突然ふらつき、倒れこんだ。どうやら、魔法の時間は終わりかけているらしい。

▼セリフ：ルシア

「そろそろ、時間みたいですね……」

「『カブト』さん。ここまで私を護ってくれて、ありがとうございます」

「『カタナ』さん。約束です。私を、ちゃんと殺してくださいね」
「あまり、いい人生ではなかったですけど……最後に、あなたたちに会えて……よかった」

◆結果

そうして、彼女は微笑んで目を閉じた。

死んだように見えるが——しかし、その胸は小さく上下している。

まだ、生きている！

●カブト：奇跡の今日

◆解説

『カブト』のエンディング。生き残ったルシアとの会話。

◆描写

キミは今、病室にいる。

キミたちの活躍で命は助かったが、検査のため入院しているルシアを見舞うためだ。

「……不思議ですね。本当は、今日なんて、私にはないはずだったのに」

そう呟く彼女の顔は、今はもう、絶望に彩られてはいない。

▼セリフ：ルシア

「ありがとうございます、『カブト』さん」

「噂通りの凄腕、でしたね。依頼を果たしただけじゃなく」

「諦めていた、未来まで、護ってもらっちゃいました」

「いつか、お礼をします。護ってもらった明日で、きっと、凄いことをしちゃいます。だから……」

◆結果

「楽しみにしていて、くださいね」

そういつて彼女は、太陽のように微笑んだ。

『カブト』の演出を確認し、シーンを終了すること。

●カタナ：闇は再び

◆解説

『カタナ』のエンディング。ルシアを狙う新たな依頼人が現れる。

◆描写

バーでグラスを傾けるキミの横に、妖艶な女が座った。

「……『カタナ』、で間違いないわね？」

毒蛇のように微笑む貌は、どこか……知った少女に似ていた。

▼セリフ：女（ルシアの義姉）

「ルシア、って娘を殺して欲しいのよ。……と言っても、^{かお}貌は知らないんだけど」

「もうすぐ死ぬだろう馬鹿な父親がね、外の女に産ませた娘。どこかででのたれ死んでいるならそれでいいのだけれど」

「生きているなら……ね、わかるでしょう？ 遺産は、正妻の子である私のものになるのが筋だもの」

◆結果

「1 プラチナム……悪くはないでしょう？」

女の問いに対し、カタナが何かを返したらシーンを閉じること。